

入選 中学生の部

バスターミナルのあたたかい時間

静岡県立浜松西高等学校 中等部 一年

あおば
青葉 圭佑

受験が近づくと小学六年生の頃の冬、塾帰りの私は駅前のバスターミナルでバスを待っていた。ズボンのポケットに手を突っこんでも、冷たい風で指先がかじかんで痛い。空は太陽が沈みかけている夕焼けで、バス停では何人かの人が並んでいた。黙ってスマホを見たり、カイロに頬を当てたりしている人もいた。

そのとき、少し離れたところで年配の男性が、バスの時刻表を見ながら困ったような顔をしていた。両手は紙ぶくろでふさがっていて、動くのが大変そうだった。私は最初、見ていることしかできなかった。でも、何度も同じ時刻表を見ては首をかしげている様子が気になり私は、

「どこ行きのバスを探しているんですか？」
男性は少し驚いたように顔を上げたけれど、すぐにやさしい笑顔になって、

「花川行きのバスに乗りたいのだけども、どこから出るのか分からなくてね。」

と言った。私は部活の大会で応援しにくくために乗ったことがあったので、十六番乗り場で乗れたことを思い出して、

「たしかあっちの方です、案内しましょうか。」

と言って一緒に歩き始めた。ほんの数秒の距離だったけれど、男性は、

「助かったよ。若い人が声をかけてくれるなんてうれしいよ。」

などと、何度もお礼を言ってくれた。私はちょっと照れくさくなって、

「いえ、大したことじゃないです。」

と答えたけれど、内心とても誇らしい気持ちでいっぱいだった。バス停につくと、ちょうど花川行きのバスが来るランプがついているところだった。男性は、

「ありがとうねえ、わざわざ。」

と言って深く頭を下げた。私は手を振った

後、自分のバス乗り場へと戻った。なぜだろう。さっきよりも少しだけあたたかく感じた。冬の寒さは変わらないはずなのに。

バスで家に帰ってからも出来事が頭から離れなかった。私は普段から、自分から声をかけるのが得意な方ではない。むしろ、知らない人に話しかけるのは緊張する。それに間違っていたらどうしようと考えてしまう。でも、あの時は違った。困っている人を見て、何かしなきゃと思ったのだ。

親にその話をすると、

「それは立派だね。小さな親切でも、された人には大きな意味があると思うよ。」

と言ってくれた。その言葉を聞いて、私は自分のした小さな親切に少しだけ自信を持つことができた。

小さな親切は、自分は大したことはないと思っただけでも、相手からしたらとてもうれしい。そして親切をした自分自身にも、あたたかい気持ちになれる。だから親切はお互い良い気持ちになることができる。あれから一年たって中学一年生になった。でもまだできることは限られている。でもだか

らこそできることを大切にしたい。これらもあのバスターミナルでの出来事を忘れずに小さな親切を持って生きていきたい。

小さな親切が人を助ける

浜松市立八幡中学校 一年

あかほり
赤堀 照文
てるふみ

先日、母とピアノのコンサートに行った。全席自由だったので、みんなが空いている席を探してホールの中を歩いていた。僕たちは早めに席を見つけて座ることができたが、開演が近づいても、まだ席を探している人たちがいた。その中には小学校低学年くらいの女の子を連れた母親がいて、二人で並んで座れる席を探しているようだった。僕が座っている列のすみの席には、おじさんが一人で座っていて、おじさんの右どなりには一っだけ席が空いていた。親子はそこで立ち止まったが、すぐに他の席を探すために動き出した。すると、その様子を見ていたおじさんがずっと立ち上がっ

て、前の列にあった一っだけ空いている席に移動した。そして、

「ここ、二人で座れますよ。」

と母親に声をかけた。その行動はとても自然でかっこよかった。親子はうれしそうにお礼を言って、並んで席に座った。僕は関係ないのに、その親子と同じようにとてもうれしい気持ちになった。

親切とはこういうことなのだと感動した。大きなことではなくても、少しの気づかいでだれかを助けることができる。それをさりげなくできるのはすごいことだ。もし自分だったら、気づいてもどうしようか迷ってしまうに違いない。知らない人に話しかけるのは、こわさがあるからだ。面倒くささははずかしさも感じる。けれども、あのおじさんのように、困っている人を見かけたら、そのとき自分にできることをするだけでいいのかもしれない。

やさしさは特別なことではない。だれかの荷物を持ってあげる、落とし物を拾ってあげる、このような行動は日常にたくさんある。学校で一人でいる友達に声をかける、

みんなに笑顔であいさつをする、そういうことも立派なやさしさだ。

今の世の中は、昔に比べて人と人とのつながりが少なくなってきた。無理をしてだれかとつながりを持つ必要はない。しかし、おじさんのような行動はすべての人が心がけるべきだ。だれかにやさしくしてもらった人は、別のだれかにやさしくなれる。やさしさがつながっていけば、大げさかもしれないが、世界中の人々の心が幸せになるだろう。

おじさんは、僕に大切なことを教えてくれた。日々のいそがしさや、様々なストレスのせいにして、自分以外の人に目を向ける余裕がなくなっていることに気づかせてくれた。僕も、あのように自然に人にやさしくできるようになりたい。困っている人を見かけたら、迷わず動けるようになりたい。あのおじさんの行動は、ほんの短い時間のことだったけれど、これからもずっと心に残っていくだろう。



ありがとうは何よりも嬉しい言葉

富士宮市立大富士中学校 一年

井出 陽南乃

私には生まれた時から一緒に住んでいる大好きな祖母がいます。祖母は足や腰が悪くて、私が小学生の頃、何度か手術しました。最近の祖母は、長い距離は歩けなくなってしまうましたが、家の中のことは何でもやってくれます。

父と母が相談して、祖母のために玄関の前に手すりを付けました。祖母は大変喜んで手すりをつかんで上り下りしています。母は、「ばあば転ばないように。」と言うことが口ぐせで、車から降りた時などは、直ぐに祖母の手を取ります。

そんな祖母を日々見てるせいか、お年寄りの方が外を歩いていたたり、シルバーカーを押している姿を目にすると、転んだら大変だと思っただけです。先日、母とスーパーマーケットに行った時、祖母よりも年齢の高い方が、買い物カート

から、お茶の段ボール一箱を下ろすことに大変苦労しているように見えました。私は走って、その方のそばに行っただけです。

「お手伝いさせて下さい。」

と言ひ、お茶の段ボール箱を持ち上げました。するとそのおばあさんは、

「ありがとう、悪いね。ここに載せてくれるかな。」

と言ってトランクを指したので、そこに入れました。買い物カートの下の段から車のトランクは高さがあって、お年寄りだと、特に重たいものは持ち上げることが大変だと思いました。

「ありがとうね。本当にありがとう。助かったよ。お店の人を呼んでくれるところだったよ。親切にしてくれてありがとう。」

と、おばあさんに言われてとても嬉しかったです。何度もありがとうと言ってももらったので、少し照れ臭かったです。前を見たら母が笑顔で私を見ていました。おばあさんは母と私に頭を下げていきました。母に、

「私は、当たり前前のことをしただけなのに、

あんなにほめてもらっちゃった。親切にしたという自覚もなかったよ。」

と言ったら、

「当たり前前のものであったとしても嬉しいし、ありがとうがたいものなんだよ。陽南乃の年齢では人に声を掛けることだって勇気がいるしね。普段から陽南乃がばあばを気づかせてくれてるからね。ありがとう。」

と言われました。確かに祖母と一緒に暮らしているからこそ、色々気付くのだと思います。今日はとても良い日でした。おばあさんや、母にたくさん、「ありがとう」を言われました。本当に小さな出来事でしたが、私には大きな自信となりました。ありがとうは、何よりも嬉しい言葉でやる気が出る魔法の言葉だと思います。

何もしない親切

富士市立鷹岡中学校 二年

遠藤 えんどう

卯海 うみ

「大丈夫?」

管理棟に一人でいる私に友達が声をかけてきたので驚いた。しかし、私は友達のように顔を見せることができません、

「うん、大丈夫。」

と小さな声で返事をするので精一杯だった。

六月の林間学校。天気も心配されていたが、気持ちのよい晴天で、私の心も晴れやかな気分だった。今回の林間学校では実行委員長を任され、今日に至るまで仲間たちとたくさんの準備をしてきた。良い行事になるよう取り組み、素晴らしい林間学校になるよう心から願っていた。そのせいか、この行事を絶対に成功させたいという、ちょっとした緊張感も持ち合わせていた。

登山、食事作りと順調に進んでいた。

学校とは違う場所、環境のため、全てのこ

とが新鮮で勉強になりとても楽しかった。

二日目の朝食作り、小さな事件が起きた。調理道具の数が、前日の数と合わないのだ。結局は、違う班が誤って持っていたしまったためだったが、その事を知らない私たちは探し回り、原因を突き詰められた。また、実行委員長という立場上、責任をとっても感じてしまい、精神的に落ち込んでしまった。

楽しい行事で落ち込んだ姿を仲間に見せたくない私は、管理棟に一人移動した。一人になると同時に悲しみも押し寄せた。なぜ、こんなことになったのだろう、仲間も不快な思いをしたのではないか、事前に何か気を付けるべきことがあったのだろうか。私の気持ちはこの行事を続けられるほどの状態には戻せそうになかった。管理棟の外では行事を続ける声が聞こえる。私はそこに戻れるのだろうか。

何分経っただろう。心配した友達が私の様子を見て来てくれた。

「大丈夫?」

と一言声をかけてくれた。私がどうして一

人であるのか、何があったのかを聞かず、一言だけであった。私も、

「大丈夫。」

一言返すだけであった。行事に再び参加した後も、友達はいつも通り接してくれた。ただ側にいてくれた。

この「何もしない親切」が落ち込んでいた私の心を救ってくれた。いつも通り接し、そっと寄り添ってくれたことで、私の気持ちはスッと元の場所に戻れたのである。

その後の移動のバスではクラスの皆で盛り上がり、牛の乳しぼり体験等を楽しむことができた。

親切とは、自分の気持ちを押し付けることではない。友達のように、自分本位ではなく、相手の気持ちを思いやり、何ができるのか、何をしてあげられるかを考え行動にうつせること。決して大きなことではなく、近くにおいてあげること。気持ちを寄せてあげることで、それだけでも相手にはとても伝わるということを私は友達から学んだ。



入選

助け合いの心に支えられて

静岡市立清水第二中学校 二年

岸山 由依
さしやま ゆい

三年前、私が小学生の頃、台風十五号の影響で断水が起きました。断水する前、私は祖母の家にて、台風により駐車場にたまった泥を、母と一緒に水で洗い流していました。すると、水道から出る水の量が次第に少なくなっていく、最終的に水が出てこなくなりました。不審に思い家に帰ってみると、水道から全く水が出なくなっていることに気がつきました。

断水中は、お風呂やトイレなどの水に困りました。他にも、料理や洗濯などの家事もできなかつたため、とても大変だったことを覚えています。また、備蓄していた飲料水の量では足りないと考えた両親は、飲料水を買に行きましたが、どの店も売り切れていて買うことができなかったと言っていました。

断水が続いていた時には、多くの人が

ちに助けてもらいました。当時私が通っていた水泳教室では、お風呂を借わせてもらい、さらには、生活用水まで分けていただきました。ここでは、施設の会員ではない人たちのことも受け入れをしていたという話を、母から聞きました。私はその話を聞き、そこで働いている方々の優しさをとても感じました。そして、同じ水泳教室に通うお母さんからは、「先に水道が復旧したから、良かったら洗濯しに来てね。」と声をかけてもらい、感謝しかありませんでした。

また、断水していない所に住んでいる親戚の家で、夕食をご馳走になり、お風呂に入らせてもらい、洗濯もさせてもらうなど、たくさんお世話になりました。親戚の家から帰る時には、ポリタンクにたくさんのお水を給水してもらいました。断水地域の店では、飲料水が売り切れだったため、いとこのお姉さんが飲料水を売っている店を探して、買ってきてくれました。親戚のみなさんには、多くのことで支えられ、心から感謝しています。

この断水の経験を通して私は、水の大切さを改めて知りました。普段は当たり前のように使っている水が無くなるだけで、生活がこんなにも不自由になってしまふとは思っていませんでした。そして同時に、自分を助けてくれる人がいることのありがたさを実感しました。地域の方や親戚からの支援があったからこそ、断水中も安心して過ごすことができたように感じます。

助けてもらった時、私はただ不慣れた生活が楽になっただけではありませんでした。周りの人の優しさに触れ、心が温かくなり、不安な気持ちが軽くなりました。だからこそ、この時の経験を忘れないようにしたいです。もし、今後災害などで困っている人がいたら、今度は自分がかを助けられるようになりたいです。

真っ直ぐな気持ち

富士市立富士南中学校 二年

北島 咲名

私は「親切」と聞くと、誰かのために大きなことをする、少し特別な行動を思い浮かべます。例えば、重い荷物を持つ人を手伝ったり、困っている人に声をかけたりすることです。これらは、目に見えて「人の役に立ちたい」という思いから生まれる行動だと思います。

私が経験した親切は、ある日の下校中のことです。前にいる小学生たちが広がって歩いているとき、後ろから車が近づいてきました。しかし、小学生たちは車に気づいていない様子だったので、私はとっさに、「車が来るよ!」と声をかけました。小学生たちは車に気づき道の端に寄ってくれました。とっさの行動でしたが、「助けたい」という気持ちで動くことができた自分に成長を感じました。

でも、よく周りを見てみると、親切だけ

でなく、日常の中に目立たないけれど心温まる「小さな親切」が沢山あることに気づきました。「小さな親切」と聞くと、もっと自然でふとした瞬間に生まれる行動を思い浮かべます。例えば、友達が落とした筆箱を拾って渡したり、後ろに同じクラスの人がいたら、教室のドアを開けて待ってあげたりすることです。誰かに見られたいわけでも、見返りを求めているわけでもなく、ごく自然な気持ちから出る行動です。

私自身、小さな親切をしたとき、「してあげよう」より「そうしたい」と思っていたことがほとんどでした。特別な理由はなく、ただ目の前の人のためにできることをした、という感覚です。そこには見返りを期待しない真っ直ぐな気持ちがあり、そうしたとき、自分の心も自然と温かくなるのです。この気持ちは誰でも持っていると思います。不思議なことに、小さな親切はされた側だけでなく、した側にも温かさを残します。その温かさを覚えているからこそ、人はまた誰かに優しくなれるのだと思います。

小さな親切は目立たなくても、心と心をつなぐ力があります。誰かの優しさに触れた人が、また別の誰かに親切を返していく。そんなふうに関わりが広がれば、周りに優しさがめぐる社会が生まれると思います。これから私は、大きなことはできなくても、まずは日常でできる小さな親切を大切にしていきたいです。そうした行動が自然にできるよう、自分の心にもゆとりを持って過ごしていきたいです。

成長のきっかけ

富士市立富士南中学校 二年

希代 瑠珂

ある日の放課後、私はいつものように学校からの帰り道を歩いていた。空はどんよりとした灰色で今にも雨が降りそうだった。傘を持っていないかった私は早く帰ろうと足早に歩いた。

曲がり角を曲がったとき、一人のおばあさんが目に入った。自転車の前かごに



入選

傘が引っかかってしまったようで、道端

で自転車を止め、困ったように立っていた。

おばあさんは傘を取ろうとしていたが、なかなかうまくいっていないようだった。

何人かの人が近くを通ったが、誰一人足を止めることなく通りすぎた。私は

「どうしようかな。」と思いながらその場に立ち止まった。知らない人に話しかけるのは少し勇気が必要だった。でも、お

ばあさんの困っている顔を見て、なんだか放っておけなくなった。

「お手伝いしましょうか？」と声をかけると、おばあさんは少し驚いたように私を見た。だが、すぐににこっと笑って、

「助かるわ、ありがとうね。」

と言ってくれた。私はおばあさんの自転車の近くに近づいて、かごに引っかかった傘を見て

みた。傘の持ち手の部分がかごの網にしっかりと引っかかっている、無理に引っぱると折れてしまいそうだった。私は両手で傘

を少しずつ回しながら、慎重に動かした。何度か角度を変えているうちに、ようやく

傘がスポッと抜けた。取れたことを伝える

とおばあさんは、

「まあ、すごい。本当に助かったわ。」

とうれしそうに笑った。私はなんだか自分までうれしくなって、

「よかったです。」

と笑い返した。その後、おばあさんは、

「ありがとうね。」

と何度も言いながら自転車を押してゆっくり歩いていった。私はその背中を見送りながら「助けてよかったな。」と思った。たった一言「お手伝いしましょうか。」と

言うのに、とても緊張していた自分。でも、声をかけてみたことでおばあさんも自分も笑顔になった。

あの時、勇気を出して起こした自分の行動は、自分の成長につながったと私は思う。これからも、困っている人がいたら、

少しでも手を差し伸べられるような人になりたい。あの日のおばあさんの笑顔は

これからも私の心にずっと残り続けている。

令和七年四月十二日、私はヘアドネーションをやりました。この決断を下すまでも時間がかかりました。それは、

小学一年生のときからずっと髪の毛を伸ばし続けてきて、髪が短い自分の姿に自信がなかったからです。

この決断を下すことができたのは、小学六年生のときに言われた父の一言がきっかけでした。

思いきった決断

静岡市立電爪中学校 二年

小林 真綾
こばやし まあや

「髪の毛を切るならヘアドネーションしてみたら？」

この一言を聞いたとき、ヘアドネーションとは何かという混乱と、もし痛いことだったらどうしようという恐怖の二つの感情が同時にきました。不安が大きかったのですぐにヘアドネーションとは何かを調べてみました。調べてみたら、病気や事故などで髪を失った子ども達のため

に自身の髪を寄付する活動のことでした。誰のためにやるのか、どれくらい髪の毛が必要なのかなど、具体的に知りたくなりたくさん調べました。病気の影響で髪が減ってしまい髪を必要とする人がいることを知って、本気でヘアドネーションをやろうと思いました。ヘアドネーションの意味をたくさん知ったので父に、なぜヘアドネーションを勧めたのかを聞きました。

「昔、小児がんの子に勉強を教えていて、薬の副作用で髪の毛が抜けてしまい、病気が治っても髪の毛がなく、子どもたちは帽子やウィッグをつけていた。寄付された髪の毛でウィッグがつくられているから、もし髪の毛を切ってそれを捨てるぐらいなら、寄付してほしいという思いで勧めた。」と答えてくれました。父の思いを知って、ヘアドネーションをしようという気持ちに更に強まりました。中学二年生の春、誰かのためになるならと勇気を出して三十センチの髪の毛を切りました。し

かし、切り終わった自分の髪を見たらとても短くて、似合っていない自分に自信をなくしてしまいました。けれど、これは誰かのためになっていると思っただら、不思議とその思いはなくなりました。ヘアドネーションして約一週間後に、私の髪の毛が届いたという連絡が来ました。誰かのもとに届いて、ウィッグをつけたことで自信をもって外を歩いてくれたらうれしいなと思いました。

現在はヘアドネーションをして約四月たっています。私は、ヘアドネーションをして本当によかったなど、切ったときも今もずっと思っています。短い髪は似合っていないと自信をなくしてしまっていた時もあったけれど、誰かのためになっていることを忘れずにいたら、反対に自信ができました。これからは何事も、相手のことを思って行動したいと思っています。

笑顔でつながる地域の力

学校法人警田東学園警田東中学校 三年

櫻井 舞花

私の父は、よく地域活動に参加しています。行事の準備から運営、片付け、防災・防犯といった安全運動など、様々な活動があり、多くは休日に行われます。私は「せっかくの休みなのになぜ参加するのだろうか」と疑問に思っていました。地域活動に参加することが、父にとってどんな意味があるのか理解できなかったのです。

そんなある日、父に「一緒に夏祭りの準備に行かないか」と誘われました。私は、休日に暑い中での活動が面倒くさかったので迷いました。ですが、父がなぜ地域活動に参加するのか気になっていたので、一緒に参加することにしました。

会場につくと、もうすでに準備をしている方たちがいました。私たちもすぐに支度をして手伝いに入りました。「大変だな」と思いながら作業をしていると、地域の方が、



入選

「準備に来てくれてありがとね。助かるよ。」と声をかけてくださいました。その瞬間、すぐく嬉しい気持ちでいっぱいになりました。誰かに感謝されることは、こんなに嬉しいことなのだと感じました。開始時刻が近づくとつれ、たくさんの人が準備に来ていて、会場は「ありがと」という言葉と笑顔でいっぱいでした。それはものすごく素敵な光景でした。いつものまにか大変だという気持ちから、地域の方と協力して活動することが楽しいと感じていました。

夏祭りが始まると、たくさんの子供たちが会場にきました。私はおもちゃすくい係になりました。子供たちに景品を渡していると、ある女の子が、

「お姉さんありがと。」

と言ってくれました。他の子も次々に、「ありがと。」

と言ってくれて、本当に嬉しくなりました。夏祭りに来た人たちが笑顔で楽しんでいる姿を見て、「準備してよかったな」と思いました。

夏祭りは、地域のためにと一人一人が一つ一つ小さな行動を積み重ねていくことで成り立っています。みんなでその行動を積み重ねていくことで、地域の方たちの心をより笑顔にすることができるようです。私は、父がいつも活動に参加している理由が少し分かった気がしました。近年、コロナウイルスの影響もあり、地域の方々の交流が減ってきています。しかし、こうしたときだからこそ、人のつながりがより大切だと思います。つながりは、特別なことからではなく、一つ一つの行動による「小さな親切」で生まれていくのだと思います。一歩踏み出して行動したことが、地域のつながりを生んで、より良い社会を作ることができるのです。これからは私も地域の一員として、小さなことでも行動していきたいです。この行動が、誰かを笑顔にできると信じています。

親切の連鎖

森町立旭が丘中学校 三年

鈴木 すずき 大和 やまと

私の親は、困っている人を見るとたとえ知らない人でも迷わず声をかけ、助けることができます。

これまで一緒に出かけた時も、迷子になっっている子供に目線を合わせて話しかけたり、動けなくなっているお年寄りに声をかけて安全な場所へ誘導したり、救急車が必要だと判断すればすぐに手配したりしていました。スーパーで荷物を落としたりして手伝うこともあります。大きなことから小さなことまで、本当に自然に行動するのです。そして名前を聞かれても特に名乗らず、「大丈夫ですよ」と笑顔を残して去っていきます。

そんな親の姿を何度も見てきましたが、私はいつも「どうしてそんな風に迷わず行動できるのだろう」と不思議に思っていました。

ある日、思い切ってその理由を聞きました。すると親は、自分が病気になった時の話をしてくれました。

当時の親はヘルプマークを付けて出かけていたそうです。しかし、見た目は健康に見えるせいか、体がしんどい時に特別な配慮をしてもらえることは少なく、息苦しい思いをすることもあったといいます。とても辛かったそうです。

けれどある日、満員電車に乗っていると、見知らぬ人がヘルプマークに気づき、「よかつたら座って下さい。」

と言ってくれました。その一言と笑顔がとても温かく、体の辛さだけでなく、心まで軽くなったそうです。

親は、「困っている時の辛さも、助けてもらった時の嬉しさも、両方を経験したからこそ、困っている人を見かけたら迷わず声をかけられるようになった」と話してくれました。

さらに私に、「まだ同じように行動できなくても全然大丈夫。大事なのは、あの人が困っていいそうだと気付くこと。その気づ

きが素晴らしいことだよ」と言いました。

その言葉を聞いて、私は少しホッとした。なぜなら、今まで私は困っている人を見かけても、「声をかけた方がいいのかな」、「間違っていたらどうしよう」と迷ってしまい、行動できなかったことを何度も後悔していたからです。

私はまず、人を助けるために何ができるのか知る必要があると思いました。

そこで、地域のボランティア講習会に参加したり、実際にボランティアに参加してみたりしました。こうした経験は、直接的な「困っている人を助ける行動」とは違うかもしれませんが、私にとっては「行動する勇氣」を身につけるための練習になっています。

実生活ではまだ、親のように迷わず助けられる場面に出会ってはいません。けれど、もしその時がきたら、私は勇氣を出して一歩踏み出したいと思います。

親から受け取った「親切の連鎖」を、次は私が誰かに渡したいのです。親の行動をきっかけに、「小さな親切」は大きな力に

なることを知りました。その優しさは、相手だけでなく自分の心まで温かくなります。私はこれからも、人の小さな変化や困りごとに気づける目を持って、その気づきを行動につなげられるようになりたいです。



小さな親切の力

城南静岡中学校 一年

せいとう
清藤 彩日

ある日の帰り道、学校の近くで一人のおばあさんに声をかけられた。自転車を押しながら、困った様子で言った。

「静岡駅まで行きたいのですが、道が分からなくて。」

私は急いでいる予定はなかったので、

「よかったら一緒に行きましょう。」

と答え、歩き出した。歩き始めてすぐ、

おばあさんはたずねた。

「どこの学校なの？」

「どこから来ているの？」

突然の質問に少し緊張したけれど、私は必要なことだけをゆっくり伝えた。

「ここは近くの中学校です。今日は部活がない日で、家は清水にあります。」

するとおばあさんは笑って言った。

「そうなの、礼儀正しいね。」

そしておばあさんは、私の歩幅に合わせ

て、自転車を押しはじめた。私も聞き返した。

「駅では何をされるんですか？」

おばあさんは言った。

「駅の近くでちよっと用事があったね。道

が分からないから自転車を押ししてるの。」

詳しい内容までは聞かなかったが、道が

分からないまま一人でいたので少し心細

かったのだろうと思った。

信号待ちの間、私は道順を頭の中で何

度も確認した。道がまっすぐでも私は普

段スクールバスを使っているので不安

だった。見慣れていない景色だったので

少したどたどしくなってしまう、伝わっ

たかは分からない。だけどこの日は、道

案内という、言葉にして伝えることで、

目に入るものが少し変わったように見え

た。

途中から、歩く速度をもう少しゆっく

りにした。それでもおばあさんが、

「一緒に歩いてくれて助かるよ。」

と言ってくれたので、その言葉に背中を

おされ、歩幅を合わせ続けた。知らない

人に声をかけられて緊張した自分が、だんだん相手を気づかう側にならなっていくのを感じた。

静岡駅に着いたとき、おばあさんはほつ

とした表情になり、

「ここまで本当にありがとうございまし

た。」

と丁寧な言葉を下げた。私は大したことを

していない。ただ、道を知っている私が、

道を知らない人と一緒に歩いただけだ。

それでも、だれかの不安を少し軽くでき

たのなら、その時間は十分な意味がある

と思えた。

親切は特別な道具や力はいらないこと

に気づく。相手の問いに答えることや歩

幅を合わせるなどの小さな行動が相手と

自分の心を温めてくれる。

これからも、道に迷っている人や困っ

ている人を見かけたら、まず足を止めて

声をかけたい。

笑顔のリレー

静岡県立浜松西高等学校 中部部 一年

竹内 玲奈

赤いランドセル。小学校に入学する時、祖父に買ってもらった。それは、毎日一緒に登下校し、小学校六年間の思い出が詰まった私の相棒のようなランドセルだった。そんなランドセルを私はとても大切にしていた。小学校を卒業すると、ランドセルの出番はなくなり、このランドセルをどうしようかと悩んだ。私は、

学校からランドセルのリメイクの案内が書かれた用紙を受け取った。私はその時、ランドセルをリメイクすることで思い出の品として形に残しておきたいと思った。だが家族からは、寄付をして使ってもらえるのなら、その方が利用価値があるのではないか、という提案を受けた。

私は、寄付を通じて何をすることができているのか、インターネットで調べてみた。発展途上国では、経済的な

理由によって通学用のカバンがない子供が多数いるとのことだった。また、日本のランドセルは質が高く、海外で高い人気を誇っていると知った。確かに、私のランドセルも六年間使用して、多少の汚れはあるが大きく壊れることはなく、まだ充分使用できる状態だ。

私はそれを知り、私がリメイクして使うよりもカバンを必要としている子供たちに向けて寄付をした方が、ランドセルにとってより幸せな選択なのではないかと考えた。ランドセルは買ってもらえない人ばかりではないと知り、家族に言ってもらったようにランドセルを必要としている人にとって欲しいと思い、私はランドセルを寄付することにした。もらってくれた誰かがランドセルを背負って楽しく学校に通っている姿を想像すると、とても微笑ましい気持ちになった。ランドセルを寄付した時に、私はランドセル以外の洋服から絵本、靴まで様々なものが寄付できることを知った。私の家には、使われていない洋服や絵本、ぬいぐるみ

などが沢山ある。使わなくなったものは捨てるのではなく、必要としている人がいるのであれば、寄付をして再び使ってもらえるのも良いのではないかと思う。今、ごみは社会問題にもなっている。寄付をすることによって、少しでもごみを減らすことができるだろう。

私のランドセルは、フィリピンに送られた。フィリピンにいる子が今頃、小学生の頃の私と同じように、ランドセルを背負って楽しく学校に通っているのだろうか。ランドセルを通じて、より学校生活が楽しいものになっていたら喜ばしい限りだ。寄付や募金などの様々な活動を通じて、より幸せな世界が創られていくことを、私は心から願っている。私が見たことはほんの些細なことだが、これからも、少しでも社会のためにできることを見つけていきたい。



入選

小さな勇氣

静岡市立清水飯田中学校 一年

竹花 たけはな
杏莉 あんり

たったの一言が、私の小さな世界を少しだけ広げた。私は昔から恥ずかしがり屋だ。友達の前では普通に話すことができるけど、知らない人の前では固まってしまい、いつもと違う自分になってしまう。授業中に手を上げるのも苦手で、間違えるのが怖くて、つい黙ってしまう。そんな私がある日、知らない人に思い切って声をかけた。たったの一言だったけれど、その言葉が私の中で何かを変えた気がした。

それは、部活の帰り道だった。少し風の強い夕方、一人で家に向かって歩いてきた。前を歩いていたおばあさんが、ポケットから何かを落とした。よく見ると、小さな水色のハンカチが地面にひらひらと落ちていった。おばあさんは気づくことなく、そのまま歩いていってしまう。すぐ声をかけようと思ったけれど、勇氣が出ず、動けな

かった。知らない人に声をかけるのが怖くて、ただ見ていただけだった。

でも、ふと「自分が同じ立場だったらどう思うだろう」と考えた。自分が大切なものを落として、それを誰も教えてくれなかったら、きつとすごく悲しい。そう思った瞬間、不思議と体が動いた。

「すみません、ハンカチ落としましたよ。」と私は勇氣を振り絞って声をかけた。おばあさんは振り返って、優しく笑って、「ありがとうね。」

と言ってくれた。肩にかけていたラケットケースを見て、

「あなたテニス部なの？私も昔少しやっていたのよ。今思うと、あの時間が宝物だわ。」と懐かしそうに話し始めた。

「試合に負けて泣いたこともあるし、怒られてばかり。でも、友達と練習した時間は宝物なのよ。」

と話してくれた。おばあさんの話を聞いていると、今は大変だけどいつかは笑って話せる日が来るんだなと思った。

それからおばあさんは、ポケットにハン

カチを大切そうにしまいながら昔のことを思い出したかのように語った。

「これね、テニスをしていたときから使っていた、たくさんの思い出が詰まっている宝物なのよ。」

とつぶやいた。さっきまで、ただのハンカチだと思っていたものが、その人にとつてとても価値の高い思い出の詰まったものであったことに気づくことができた。たったの一言がかけられていなかったらとても後悔をしていたと思うと勇氣を出して、声をかけて本当に良かったと心が温まった。ただ拾って渡しただけ。でも、その「たったの一言」で、大切な気持ちを守ることができたかもしれない。「小さな勇氣」が、こんなにも誰かを助けられるんだなと初めて知った。恥ずかしがり屋な私でも、誰かのためになれる。そう思えたことが何よりも嬉しかった。ないない帰り道が私に勇氣をくれた特別なものになった一日だった。

言葉を超えて繋がる「小さな親切」

富士市立富士南中学校 三年

ひろせ
廣瀬 太郎

僕は小さい時から他人と話すのが苦手でした。うまく話せないし、自分から会話に入ることも出来ません。学校外で誰かに遊びに誘われることもなく、家で一人で過ごすのが好きでした。そんな僕だけど、三年間学校に行きたくないことはなかったです。

この中学校の三年間が、そんな僕を大きく変えてくれました。幸運にも、僕は素晴らしいクラスメイトに恵まれ、みんなの「小さな親切」に支えられ続けたからです。

僕の苦手なことは、人と話すことだけではないです。授業中、先生に指されて発表する時、間違った言葉や文章を使ってしまふことがよくありました。自分の思っていることをうまく言葉に出来ず、周りのみんなはきつとおかしいと思っっているだろうなと、いつも恥ずかしさを感じていました。それでも、クラスのみんなは誰も笑わな

かったと思います。それどころか、「そこはこうじゃない?」とそつと正しい言葉や文章を教えてくれたり、「言いたいことはこういうことかな?」と、僕の言葉を感じとってくれました。みんなは、僕の不器用さを笑うのではなく、僕が伝えたいことを理解しようと寄り添ってくれたのだと思います。その優しさは、僕にとって大きな安心感となりました。

もう一つ、僕を変えてくれた大きな出来事があります。それは、吹奏楽部の活動です。僕は一年生から三年間、打楽器のレギュラーとしてコンクールに参加することが出来ました。吹奏楽部に入っただけの頃は、他の部員とうまく話すことが出来ませんでした。しかし、先輩も後輩も、そんな僕に声をかけてくれました。二年生のコンクールの時に、卒業した先輩が見に来てくれました。「頑張ったじゃん!背が高くなったじゃない?」
学校で見掛けた後輩が手を振ってくれました。

「先輩っ!」

僕は笑って手を振ることしか出来ませんでした。そんな些細な一声が、僕を救ってくれました。それらは、僕が一人ではないことを教えてくれる魔法の言葉でした。誰かが自分のことを見てくれている。そう感じられるだけで、僕は頑張ることが出来ました。

クラスや部活の仲間たちは、僕に何か特別なことをしてくれただけではありません。ただ、ほんの少しだけ、僕に心に向けてくれただけです。みんなにとっては当たり前前の「小さな親切」が、そのことによって、僕は三年間楽しく学校生活を過ごせました。

言葉でうまく表現できなくても、心は通じ合えることを強く感じました。相手を思いやる気持ちや寄り添う姿勢は、言葉よりも強く、その心を伝えることが出来ると思います。そして、僕も言葉は苦手でも、心で繋がる優しさ、「小さな親切」を差し出して、誰かの心を支える存在になりたいと思います。



入選

自分に厳しく

浜松市立蛸塚中学校 三年

藤沢 ふじさわ 幸穂 さちほ

「迷ったときは、大変な方を選びなさい。自分が今していることはいつか全部自分に返ってくるからね。」

私が良くないことをしたとき、昔から両親によく言われてきた。自分が行ったことはどんなことも、自分に返ってくるから、後悔の無いように選択してほしいという意味だ。この言葉は、どんな場面にも通用し、心に響くとても良い言葉だと思う。でも、小さい頃の私は、この言葉の意味がよく理解できなかった。いくら習い事を頑張っても先生にほめられないときや、家のお手伝いをしてもお小遣いがもらえないとき。結果がともなっていないことは世の中にたくさんあったからだ。人間は目に見える結果ばかり気にするから、当然悪い結果にも注目してしまう。だから、「どうせ頑張っても」と

いう思いが増え、どんどん自分に甘くなる癖ができていた。でも、今になって両親が何を伝えたかったのか、よく分かってきた。

春休み、私は友人と待ち合わせした場所へ向かうために、駅周辺を急いで歩いていた。そのとき外国の女性に、「このバス停の場所はどこですか。」

とスマホで写真を見せながら、カタコトの日本語で聞かれた。自分は他の場所へ行くために急いでいたので、どうしようか迷ったが、両親から言われた言葉を思い出して案内しようと思った。今まで学校で習ってきた英語を最大限に使い、コミュニケーションをとりながら移動した。バス停までは距離があったが楽しく会話していると、あっという間に到着した。バス停に着くと、ニコツとしながらも感謝されて嬉しかった。友人との約束には少し遅れてしまったが、それでも女性を助けられて良かったと思えるほど、達成感があった。

一ヶ月後、自分がしたことを、そのまま

自分もされることになった。他県に住む祖母の家の周りを歩いていると、よく知らない地域だったので、道に迷い帰れなくなってしまう。迷っている私を見て、優しく声をかけてくれたおばさんがいた。どこに行きたいかを伝えると、丁寧に道を教えてくれて、私は感謝の気持ちでいっぱいだった。助けてもらえることがどれだけ安心するかを実感して、改めて人を助けることは、とても素敵だと思った。

自分が他人に行ったことは良いことも悪いことも、自分が気づかないくらい小さなことも、全部いつかは自分に返ってくる。自分に悪いことが起きたとき「あのときのせいかな。やめていれば良かった。」と、今までの自分の行動を後悔したくない。だから、私は自分に厳しく、他人に優しく、生きていきたい。それが小さな親切に繋がると思う。

お客様の思いやり

富士宮市立富士宮第四中学校 一年

ふじわら
藤原 奈央

私の両親は精肉店を経営しています。

常連さんも多く、私が学校から帰ってくると、お客様にお帰り！とか大きくなつたねと声をかけられます。お店の手伝いはなかなかできませんが来てくれるお客様の顔はなんとなく覚えていきます。お客様の中で一人気になるおばあさんがいます。毎日買い物に来てくれます。しかし、一日に何回も来店し、毎回同じ品物を買っていきます。だから母が、

「さつきも同じ物を買ったから、食べきれないよ。」

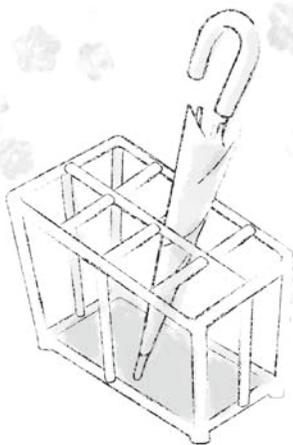
と言って買うことを止めることもあります。時には、注文しておばあちゃんの所に届けると、注文したことを忘れてしまったのか、返されてしまうことがあります。そんな光景を何回も見ることがあるので、私は母に、「あのおばあちゃん、迷惑だね。」

と言ったことがあります。すると母は、おばあちゃんは一人暮らしで、色々な事を忘れてしまうようになってしまったということとを教えてくださいました。お店に来た時にしか、おばあちゃんのことを気にかけてあげられないけれど、来た時には少しでも手助けをしてあげたいと言った母に、私が言った言葉がはずかしくなりました。

雨がとても強く降っている日に、そのおばあちゃんはいびしょぬれで来店しました。いつもと同じ物を買って。お店にはもう一人お客様がいて、もう一人いたお客様のかさをさして帰ってしまったようです。だから、かさを持っていかれたお客様が困っていました。すると父が家のかさを渡し、帰ってもらいました。そのお客様はかさを返しにきてくれました。そのお客様に母が、おばあちゃんのかわりにかさを取られたことをあやまっていたら、そのお客様は、おばあちゃんがかさを持っていたことは気づいていたそうです。おばあちゃんがぬれてしまうと思つて、そのまま声をかけず、少しでも

雨が小雨になるのを待つつもりでいたところ、父がかさを貸してくれて、ありがとうございました。と言って返しに来てくれました。母はそのお客様の心の広さにととても感動していました。私もとても素敵な人だと思いました。

母やお客様の思いやりはおばあちゃんには伝わってないかもしれないけれど、私もだれかの思いやりや優しさに支えられているんだと気づきました。小さな思いやりでも、みんなが行動できたらもっと明るく楽しい世の中になると思っています。



迷子の女の子と私

静岡市立清水飯田中学校 一年

古牧 ふるまき 愛真 えま

毎年、お盆の時期になると家から電車とバスを乗り継いで約二時間、バス停から歩いて約十五分ほどの祖母の家に私一人で行く。最初はとてもドキドキしたけど、毎年行っていると慣れてくる。

そんな見慣れている道を歩いていると、あと五分くらいで祖母の家につきそうなところに四歳くらいの女の子が一人で泣いていた。迷子みたいだったが、正直その子のお母さんかお父さんを見つけるのは面倒くさかった。でも、泣いているのを見て、とどうしてもそのままにしておけなくて、とりあえずその子に声をかけてみると、とても不安そうな顔でこっちを見た。結構長い時間泣いていたようで、目が真っ赤に腫れていた。

とりあえず家はどこか聞いてみると、「わからない。」

と返ってきた。多分わからないだろうとは考えていたが、本当にわからないとなると、この辺りには交番がないのでとても困ったことになった。近所を回って探してもなかなか見つからないかもしれないし、そんな面倒くさいことはしたくなかった。しばらく考えてみると昔、祖母が「この辺りの家の人たちはみんな知り合いなのよ。」と言っていたことを思い出した。なのでとりあえず女の子を連れて、祖母の家に向かうことにした。

祖母の家につくと、ドアを開ける前に祖母が出てきた。ちょうど出かけるころだったらしいが、女の子のことを聞いてみると、すぐその家の子らしい。女の子も祖母のことを知っていたようで、とてもホッとしたような顔をした。祖母はこれから用事があるようで、代わりにその子を家まで送り届けるようにと言われた。

女の子の家についてインターホンを押して事情を説明するとすぐに家からその子のお父さんらしい人が出てきた。話を聞くと、女の子がお母さんと買い物をしている

とき、ふと目を離した瞬間にいなくなってしまったという。

女の子の両親にはたくさん感謝されて、お菓子もたくさんもらったが、女の子に「ありがとう。」と言われたのが一番嬉しかった。

今までこんな経験がなかったから、祖母の家に帰る道がいつもと違ってなんだか現実ではないみたいだった。祖母の家についても、ご飯を食べていても、布団に入っても、次の日に起きるまで、いつもとは全く違う風景を見ているようだった。

お盆が終わって、家に帰るために電車に乗って景色を見ているときにふとそのことを思い出した。思い出しているとなんだか胸が温かくなった気がして、また嬉しくなった。

人が喜ぶことをするのは相手も自分も嬉しくなることだからこれからはより相手のことを考えて喜んでくれるようなことをしたい。

小さな親切のバトン

富士市立吉原第三中学校 一年

穂坂 風羽

「最後尾はこちらですよ。」

お兄さんのその一言に、私はハッとしました。夏祭りの会場、たこ焼きの屋台の前で、どこまでが列なのか全くわからず、人ごみの中で立ちつくしていた私に、知らないお兄さんがやさしく声をかけてくれたのです。人ごみの中で不安だった私にとって、その言葉はまるで道しるべのように感じられました。

「教えてくれてありがとうございます。」

お兄さんにお礼を言って列に並びました。とても短いやりとりでしたが、心がとても温かくなりました。

私もあんなふうに困った人を助けてみたいなど思いながら列に並んでいると、少し後に高校生くらいのお姉さんたちがやってきました。私たちと同じように、どこに並

べばいいのか戸惑っている様子でした。私はさっきのお兄さんの姿を思い出して心の中で何度も声をかける練習をしました。しかし、声をかけることはできませんでした。「間違っていたらどうしよう」「変に思われたら恥ずかしい」そんな気持ちでぐるぐるの頭の中を回ってしまっただけです。お姉さんたちは少しして、自分で列を見つけていました。

私は自分にすごくがっかりしていました。さっき私は親切にしてもらったのに、私はそれを誰にも返せなかった。ただ見ただけの自分が恥ずかしく思えました。でも、チャンスはもう一度やってきました。今度は子供とお母さんが同じように迷っている様子で私の近くに立ち止まりました。私は声をかけるか迷いました。でも、さっきの自分を思い出し、「今度こそ」と心の中で言い聞かせました。

「最後尾はあちらですよ。」

勇気を出して声をかけた瞬間、お母さんがパッと笑って、

「ありがとうございます。」

と言ってくれました。たったそれだけのことなのに私は胸の奥が温かくなりました。そして、もっと嬉しい出来事がありました。その後、また別の家族が列のそばで困っているのが見えました。すると、さっき私が声をかけたあのお母さんがその家族にやさしく教えていたのです。

「最後尾はこのあたりですよ。」

私はその出来事を見て、胸がいっぱいになりました。私の小さな勇気がお母さんのやさしさにつながって、また別の人へつながった。まるで親切のバトンがどんどん手渡されていくようでした。

最初は何もできなかった私が、一歩を踏み出すことで誰かを助けることができました。これからは、私も誰かにそのバトンを渡せるように、小さな親切を続けていこうと思いました。そして、そのバトンが、もっと遠くまでつながっていくことを願っています。



入選

譲る

静岡市立清水飯田中学校 二年

まえだ
前田 まりあ

私が友達と遊びに行くためにバスに乗ったときのことです。その日は休日ですが乗っている人は多く、私は偶然空いていた席を見つけて「ラッキー」と思いながら座りました。

遊びの計画を友達と話していると、次のバス停でおばあさんが乗ってきました。杖をついていて、バスに乗るのも大変そうなおばあさん。でもバスはまだ人が多く、おばあさんが座れるスペースはありませんでした。おばあさんは揺れるバスで立っているのがとても大変そうでした。私達はおばあさんに席を譲らなければ、と思っていました。でもなぜか恥ずかしくて、誰かが譲ってくれるだろうと、人任せにして行動に表せずにいました。

言い出せない自分達にモヤモヤしていると、私達より小さい幼稚園児ぐらいの男の

子がすんなりとおばあさんに席を譲ったのです。お母さんに言われたわけでもなく譲った男の子に私達はびっくりしました。

席を譲られたおばあさんは安心したような顔で微笑み、男の子に、

「ありがとうね。立っているのが大変だったから助かったよ。」

と感謝を言っていました。

「ありがとう。」

と感謝された男の子はとても嬉しそうに照れながら笑っていました。

男の子は、感謝をされたのがよほど嬉しかったのか、おばあさんに席を譲ったあとも幼稚園で楽しかったことや習ったことを、楽しそうに話していました。

私達はその様子を見て、恥ずかしいを理由に人任せにし、行動しなかった自分達を恥ずかしく思いました。自分達よりも小さな子が行動できているのに、私達はなぜできなかつたのかと、反省しました。おばあさんと男の子のやりとりは、バスのおとんとどの乗客が感心するように眺めていて、恥ずかしがるなんてことはしなくていいんだ、

と私達は思いました。人を助けることは悪いことではなくて、良いことなのだから胸を張って行動していいのだと考えを改めることにしました。私達は降りるバス停までその微笑ましい光景を眺めていました。

そしてバス停について降りるときに、私達は席を譲った男の子のお母さんが妊婦さんだと気づきました。私達はそのお母さんを見てきつとその子は普段からお母さんに、妊婦さんやお年寄りの人が居たら席を譲ってあげるのだと教えられていたのだ、と思いました。

幼稚園児ながらにお母さんの教えをしっかり守り、自分から行動する男の子に私達は、きつといいお兄さんになるよね、と心が温まりました。

私達は、その出来事があった日から困っている人が居たら、進んで行動できるようになりました。男の子に感謝をしたいです。

つながっている親切

浜松市立観塚中学校 一年

もととき
本木 遥己
はるき

僕は、母から聞いた、今でも心に残っている話があります。それは、僕がまだ母のおなかの中にいた時。東日本大震災が起きた時のことです。

あの日、母はおなかに僕を宿しながら必死におなかを守り、近くの避難所に避難しました。そこでは、テレビに被害状況が映っていて、建物ごと流される映像を見て母は衝撃を受けたといえます。それから一日後、準備が整い、実家に帰ろうとしていました。しかし電車は止まり、駅には大勢の人があふれていたそうです。混乱の中、ようやく動き出した一本の電車に、多くの人が乗ろうとして殺到していました。そのとき、一組の老夫婦が母に声をかけました。

「あなた、おなかに赤ちゃんがいるのね。私たちは次のにするから、この切符を使っ

て早く避難しなさい。」

そう言っ、二人は自分たちの切符を母に差し出し、母を電車に乗せてくれたのです。そのおかげで、母は無事に帰ることができ、僕も安全な場所で育つことができました。その時のことを話す母の目は、少しうるんでいます。そして母は必ずこう言います。

「あのときの親切がなければ、あなたになにかあったかもしれない。」

見知らぬ人に切符をゆずること、それはほんの一瞬の、ささやかな親切なのかもしれません。でも、その親切が母と僕を守り、今の僕の命につながっています。僕はまだ、その老夫婦に会ったことはありません。でも、母を助けてくれたあの人たちのように、困っている人を見たら、今度は僕が手を差し伸べられるような人になりたいと思っています。親切は、目には見えなくても、たしかに人々をつなぐ力があると思います。誰かのためにした小さな行動が、やがてまわりまわって自分にも返ってくる。そんなふ

うに、この世界はやさしさでつながっていると、母の話を聞くたび感じます。これから僕も、そのつながりの一部になれるように、小さな親切を大切にして生きていきたいです。



「親切」について思うこと

富士宮市立大富士中学校 一年

よしだ
吉田 凌旺

夏休み、サッカーの練習に通うため乗りつぎをふくめ六十分ほど電車に乗る。

大きなリュックに二リットルの水筒と着替え一式、タオルやスパイクをつめこんである。保冷用クーラーボックスには、お弁当や補食、経口補水液などを入れてある。両手に荷物を持ち、なかなかの重さのリュックを背負って移動することになる。今日もいい天気で、とても暑かった。汗をかきながら乗りこむ電車の中は涼しくて、一刻も早く荷物をおろしたくて座る場所を探した。一両編成の電車なのですぐに満席になる。今日はラッキーなことに座る場所を見つけた。リュックをおろして一息つけた。次の駅でぼくの斜め前あたりにおばあさんが立った。他に座る場所はなく、ぼくは席を譲るべきだと思った。でも、すぐに声をかけられなかつ

た。もし断られたら恥ずかしいな。お年寄り扱いしてキレられたら嫌だな。他に荷物の少ない人もいるしなあ：なんだか色々考えているうちに、別の大人の人が席を譲った。ぼくだって、本当は譲るべきだと気がついていたら、譲ろうと思っていた。でも、いいことしようとする勇気がでなかった。そんな自分がっかりした。

移動中、小学生の頃からあいさつをきちんとしていた。と教わったことを思い出していた。学校の行き帰り、知らない人にも「おはようございます」とか「さようなら」とか積極的にあいさつすることを教わったが同時に知らない人には気をつけるようにも習う。いい人と悪い人の区別なんてひと目見てわかるのかな？こちらから積極的に歩み寄る必要はあったのかな？などと矛盾してたのではないかと考えていた。今の状況も、自分は親切のつもりでも相手がどう捉えるかによっては余計なお世話で、親切にしたつもりがこちらが嫌な気持ちになったらどうしよ

うとか、他人がどんな考え方の持ち主かわからないのに、こちらの親切を押し付けるのはちょっとちがうかもしれない：とか考えていた。でも、結局ぼくは席を譲ることはできなかったし、そのことについて後悔している。自分のできなかったことに対して、正当化するために色々考えてみたが、健康で元気なぼくが、おばあさんに席を譲るべきだったし、相手に感謝してもらうためではなく、ぼく自身が後悔しないためにも、もっと早く声をかけるべきだった。今回、小さな親切を行うことができなかったことは、ぼくの気持ちの準備不足も理由のひとつに挙げられる。普段から何か困っている人やそういう状況にそうぐうした場合に備えて心の準備をしておこうと思った。ぼくは小さな親切に失敗したけれど、次に活かせる失敗になればいいなと思っている。